

「事態間読み込み」という観点からみる *As* の意味論*

花 崎 美 紀

1. はじめに

前置詞や接続詞は、一般的に「機能語」と呼ばれ、「意味」をもつ「内容語」とは区別して考えられてきた。その結果、Brugman (1981, 1985) や Lakoff (1987) 以前において、前置詞の「意味」が研究対象になったことはほぼ皆無であり、Tyler and Evans (2003) においては、前置詞はこれまで「無視」されてきたと言っているほどである。Jakendoff (1973) に至っては、「これまで前置詞をまともに扱ってきた人はいない」とまで言っている。

最近になって認知言語学が台頭し始めており、その理論の元では、生得的な言語能力 (UG) を設定しないため、すべての文法事項には意味があるとされる。前置詞は、上述の通り「機能語」として、その「意味」が語られることがほとんどなかったため、すべての文法事項には意味があるとする考えを証明する牙城として大きく取り扱われるようになり、その結果、前置詞研究は認知言語学の主要なテーマの一つとなっている。

認知言語学における前置詞研究の多くは、Brugman (1981, 1985) や Lakoff (1987) に代表されるように、語にプロトタイプ的な中心義を設定し、他の意味は、そのプロトタイプからの派生義として、家族的類似 (Wittgenstein 1953) を元に semantic network を構成すると扱われる。例えば、Brugman (1985) において、*over* の中心義は (1) の *over* に代表されるような ABOVE + CROSS と設定され、他の意味、例えば (2) のような例文における *over* はプロトタイプの ABOVE の部分が、(3) の *over* は CROSS の部分がプロファイル (焦点化) され、メトニミーによって派生していると説明している。

- | | |
|---|---------------------------|
| (1) The plane flew over. | (Lakoff 1987: 516) |
| (2) Hang the painting over the fireplace. | (ibid.: 524) |
| (3) Arlington is over the Potomac River. | (Tyler and Evans 2003: 4) |

ところが、このような説明の仕方は、Hanazaki (2004) などが批判する通り、多くの問題点を含む。大きな批判点としては、以下の3つがあげられるであろう。①語特有の意味ではなく、Tyler & Evans (2003) がいうところの “Linguistic Context” を語の意味として分析している可能性がある ②作成する Semantic Network の妥当性を立証できない ③際限なく意味が拡張する可能性を阻止できない。

①の批判点を具体的に見てみよう。Brugman (1985) においては、上掲の(1)の *over* の意

* 本論文の *as* の記述の部分については、加藤 & 花崎 (2003)、Hanazaki & Kato (2006) を元に、加筆修正したものである。

味は ABOVE + CROSS の意味として、つまり、上方を動くという意味として、また、(2)の意味は ABOVE の意味として、つまり、上方で静止した意味として、分析されている。しかしながら、その移動 / 静止という意味の差は *over* に帰するものではなく、それぞれの文にでてくる別の語 (linguistic context), この場合は動詞 *fly*, *hang* に帰すると分析するべきであるといえよう。

②の批判点の具体例としては、(4)は(1)からの意味拡張としても、また、(3)からの派生としても見ることができる。弧のような軌跡を残すという点では、(1)からの派生として見ることができる。同時に、フランスという「向こう側」へ行ったということに注目すれば、(3)からの派生としてみるのが妥当である。さらに、どちらの案にしても、確証はできないであろう。

(4) They have gone over to France.

(OALD¹)

③点目の批判とは、類似性で意味拡張を説明すると、際限なく意味が拡張してしまう可能性を阻止できないというものである。どんな2つのもの間にも類似点は認められる可能性があり、類似性によって意味が拡張するとすれば、どんな意味にも広がってしまう。的確な理論とするためには、この際限ない意味の拡張を阻止するメカニズムを備える必要がある。*over* の例でいうなら、(2)の *over* は上方で静止しているという意味なのであるから、それとの類似性をもって、**My nose is over the mouth* がなぜ非文になり、この場合、*over* でなく *above* が使われるかが説明できない。

上記の、多義に対して、語の様々な意味は類似性によってつながっているとして Semantic Network を使った説明に対して、単義論を採ることも可能である。この方策は、*On Monosemy* (Ruhl 1989) というタイトルの本を書いた Ruhl などに代表されるものである。しかしながら、この理論にも、少なくとも次の2点の問題点が挙げられるであろう。(問題点は上から連続の番号をつける) ④すべての意味に共通する語の意味の「コア(核)」を求めるとなれば、そのコアは、非常に抽象的なものになる可能性があり、他の語のコアとの差異を示すことが難しくなる ⑤意味の変化を説明することが難しくなる。

④に関して言えば、様々な *tree* に共通する「コア」を求めようとするなら、そのコアは、*bush* のコア、あるいは、もしかしたら、枝のコアと変わらないものとなってしまおうであろう。

また、語の意味は絶えず変化するものであるが、⑤として述べたとおり、単義論をとるなら、その語の意味変化は、その徐々に起こる変化は説明できず、missing link を持つものとなってしまおう。

これらの①から⑤の問題点に対して、筆者は、Hanazaki (2004, 2007), Hanazaki & Kato (2004a, 2004b), そして、加藤 (2006) などにおいて、多義は用法とコアの2段階において説明するべきであり、かつ、近似語による緊張関係をもとに説明する必要があると提唱してきた。つまり、筆者はこれまで多義を説明するモデルを提唱してきたおり、それは、多義語に複数の用法を認め、それらには共通するコアがあり、そのコアは「事態間読み込

¹Oxford Advanced Learners' Dictionary

み」により様々な用法を持つとするものである。また、そのモデルは、用法に引っ張られ、コアが変化することもあるとし（批判点⑤に対応）、語は近似語と緊張関係をもっており、その近似語が意味の過大な拡張を妨げ（批判点③に対応）、二つの語の用法が重なった場合、どちらかが意味を獲得し、使用されなくなった用法は慣用表現として残るとしている。「事態間読み込み」とは、*over* を例にとって説明すると、*over* には「上に広がりをもって重なっている」というコアがあり、「上」や「超えて」などをはじめとするいくつかの用法を持つが、静止している状態を表す動詞が使われている一つの事態においては「上に広がりをもって重なっている」というコアは「上」という「用法」をもち（静止しているという「事態」を読み込んで *over* の意味用法は決定される）、「飛ぶ」ことを表す動詞が使われている事態においては「飛ぶ」という事態を読み込んで「超える」という意味用法を持つとするものである。（加藤&花崎（2006a, 2006b）など）。このモデルを図にすると、以下の図1のようになろう。

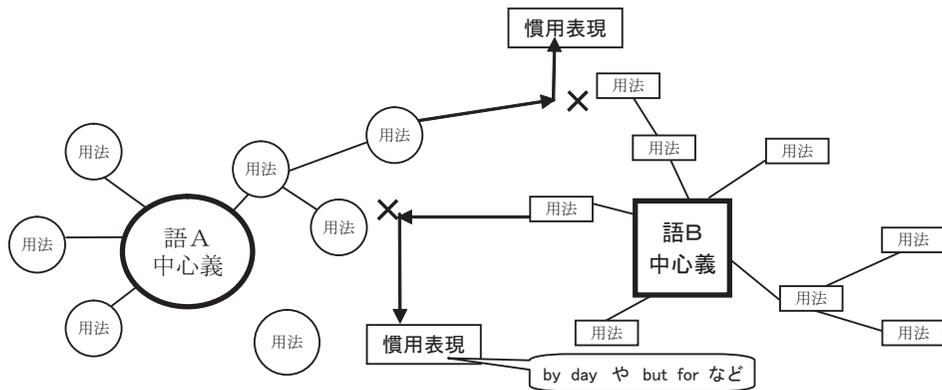


図1 多義モデルの概念図

本論文は、このモデルが提唱する、「事態間読み込み」という考えを使って、*as* の多義を説明し、結果、以下の3点を結論とするものである。

(5) 本論文の結論

- a. 一般的に「意味」と呼ばれるものは、その語がもつ「意味」でなく、話者が会話内で行っている「事態間読み込み」（推論）の結果であることがある。
- b. 多義の意味用法の広がり、一般的に言われているような *metaphor* や *metonymy* によるものばかりでなく、人間の知覚により産まれることもある。
- c. *As* の意味は一般的に思われているような意味（「時」、「譲歩」など）をもっているのではなく、2つの事態をつなげ同時性を表すというコアを持つものである。

2. 辞書による As の意味と、本論文が扱う範囲

As は非常に多義である。OALD は11個の意味を、Cobuild は12個の意味を、Random House は31個の意味を挙げている。以下の(5)~(25)は、『研究社英和中辞典』が挙げている *as* の意味である。

- (6) 【副】 同じ程度に, 同様に, 同じくらい He's *as* tall as you (are).
- (7) 【接】 ... と同じく, ... と同様に, ... のように, ... ほど He's as tall *as* I [me].
- (8) 【接】 ... のように (実に, 最も) (as) busy *as* a bee
- (9) 【接】 ... ほどの A man *so* clever *as* he is not likely to make such a blu
- (10) 【接】 ... するほどに He was *so* kind *as* to help me.
- (11) 【接】 ... のように; ... のままで Do *as* you like.
- (12) 【接】 ... のように, ... と同じように As rust eats (into) iron, *so* care eats (into) the heart.
- (13) 【接】 ... している時, ... したとたんに; ... しながら
He came up to me *as* I was speaking.
- (14) 【接】 ... ころに, 時には As a boy he was a good swimmer.
- (15) 【接】 ... につれて, ... に従って As we go up, the air grows colder.
- (16) 【接】 ... だから, ... ゆえに As it was getting dark, we soon turned back.
- (17) 【接】 ... ので Young *as* he was, it is not strange that he should have acted sofoolishly.
- (18) 【接】 ... だけれども, ... ながらも Young *as* he was, he passed with flying colors.
- (19) 【接】 (どんなに) ... してみても Try *as* you *may*, you *won't* find it easy to solve the problem.
- (20) 【接】 [直前の名詞の概念を制限して] [形容詞節を導いて] The origin of universities *as* we know them is commonly traced back to the twelfth century.
- (21) 【接】 [形容詞・過去分詞・前置詞を伴い] Socrates' conversations *as* reported by Plato are full of a shrewd humor.
- (22) 【接】 ... ということを (that) "Can you do it?" "I don't know *as* I can."
- (23) 【代】 ... のような *such* food *as* we give the dog
- (24) 【代】 それは ... だが He was not English, *as* I knew from his accent.
- (25) 【前】 ... として He lived *as* a saint.
- (26) 【前】 ... と, ... だと I regard him *as* a fool.

本論文は、紙面の関係上、上記の中でも、我々が呼ぶところの<時><理由><条件><譲歩>の4用法について扱うこととする。他の用法については、加藤 & 花崎 (2003, 2006

(a), 2006(b)), などを参照されたい。

3. 先行研究

上述のように、英語の、「機能語」と呼ばれていた語の多義に関する先行研究は非常に少なく、その中でも *as* に関する論文は、衣笠 (1979)、小川 (1985)、八木 (1993(a), 1993(b)), 市川 (1986) 等の少数を除いて、皆無に近い状態である。また、*as* を扱っているこれらの論文においても、多義である *as* のすべての意味を扱ったものは一つもなく、これらのすべてが、*as* の一用法あるいは数用法のみを取り上げ (例えば衣笠 (1979) の論文のタイトルは「時を表す *as*」である)、そこから *as* の意味を語ろうとしている。しかしながら、(6)~(26)に見られるように、*as* の意味用法は多岐にわたっており、一つの用法のみを取り上げて、*as* について語るのは、不可能である。

例えば、市川 (1986) は、その論文「*as* 譲歩構文の特異性」において、*as* の譲歩の用法は、(27)で表されるような意味構造を持っており、*X* は [+gradable] をもつ変項であるとしている。

(27) SX-*as*-NP-(Aux) - be X : [+gradable]

しかしながら、この構造はすべての *as* の意味用法を説明するにはほど遠く、すべての意味用法に、このような意味構造を認め、我々は文を発する際には、その文にあるすべての語にこのような意味構造を想定し、話者は文を発するとは思いがたい。

先行研究の中で注目に値するのは古賀 (1998) である。古賀は、*when* の意味を考える際に、*as while* と比較し、*as* は、同時性を表すだけでなく、2つの事態の動的同時進行を表すとした。

(28) a. *As I left the house, I remembered the key.*
 b. *When I left the house, I remembered the key.* (古賀1998 : 24)

(28a) において *I* はまだ玄関にいると考えられ、(28b) の *I* は、ドアからもうすでに離れていると思われる。ここから、*as* が何らかの行為を表す節と使われる際には、その2つの状態ではなく、その同時性や動的同時進行性 (dynamic progression) を表すとした。これについては、また5章で戻ってくることにする。

4. データの分析

As が実際にどう使われているか、また、*as* の包括的な説明をするために、本論文は、認知言語学が提唱する、“bottom-to-top model” あるいは、usage-based model (Tomasello 2005) などと呼ばれるモデルを採用し、実際に使われているデータを採取し、それらのデータを分析するという手法をとることとする。

British National Corpus と BROWN コーパスを使い、本論文は *as* の用例を3137例、採取した。そして、次段階として、それらを usage-based model を元に、タイプ分けしたところ、以下の8タイプに分けることができた。(これらの用法タイプは、必ずしも、厳密に分けられるものではなく、連続体をなした8タイプである)

- (29) *As* のデータの8つのタイプ (3137データ)
- a. <~と同じ> He's as tall as I [me].
 - b. <~ように> Do as you like.
 - c. <~として> I regard him as a fool.
 - d. <直前の名詞の概念を制限して>
 Language as we know it is a unique human property.
 - e. <時> He came u p to me as I was speaking.
 - f. <理由> Young *as* he was, it is not strange that he should have acted so foolishly.
 - g. <条件> Pan American's office on the left as you enter the driveway that leads...
 - h. <譲歩> Young as he was, he passed with flying colors.

5. *As* の多義

多義研究において、用例をタイプ別にわけたあとに進むべきステップは、用法の関係を記述することである。

従来の多義研究は、上述の通り、各用法は metaphor などを元に類似性によって意味拡張していると説明し、当該語の Semantic Network を作成することを通してその語の多義を説明する。この方策は数多くの先行研究に見られ、数個挙げるとしたら、Lakoff (1987) の他にも、瀬戸 (2000), 瀬戸・山口・武田・小森 (2000), Lagnacker (1987), Taylor (1989) などが挙げられるであろう。Taylor (1993) では、その意味拡張の一般的な多義化プロセスが8プロセスにまとめられている。

- (30) Taylor (1993) による、多義化の8プロセス
- a. Extended Tr \leftrightarrow Multiplex Tr.
 - b. Place of Tr \leftrightarrow Path of Tr
 - c. 1-D Tr \leftrightarrow 2-D Tr \leftrightarrow 3-D Tr
 - d. Place of Tr \leftrightarrow Goal of Tr
 - e. Place of Tr \leftrightarrow Place on Path of Tr
 - f. Path \leftrightarrow Place construed as end-point of Path
 - g. Path of Tr \leftrightarrow Goal of Tr at end-point of Path
 - h. Goal of Tr \leftrightarrow Place of Tr as Result of Tr reaching Goal

(Taylor 1993: 157-166)

しかしながら、これらのどのプロセスを使っても、〈譲歩〉の意味は説明できない。〈譲歩〉は、他のどの用法とも「類似」関係にはない。

本論文では、よって、「類似性」によってではなく、コアと用法をわけて2段階の意味を認めるモデルを使って説明する。

日本語、英語を言語内、そして超言語レベルで見たときに、*as* の多義と同じように〈時〉〈理由〉〈条件〉〈譲歩〉の用法を同時に持つ語・文法事項が多く見られることに気がつく。例えば、英語の分詞構文、そして日本語の「テ」は同じような意味用法をもつものとして挙げることができよう。

- (31) 分詞構文に見られる〈時〉〈理由〉〈条件〉〈譲歩〉
- a. 【時】 Walking along the street, I met a friend of mine.
 - b. 【理由】 Being sick, he stayed at home.
 - c. 【条件】 Turning to the left, you will see the building right in front of you.
 - d. 【譲歩】 Admitting what you say, I still think that you are wrong.
- (32) 「テ」接続に見られる〈時〉〈理由〉〈条件〉〈譲歩〉
- a. 【時】 通りを歩いていて、私は友人に会った。
 - b. 【理由】 病気が長引いて、彼は家にいた。
 - c. 【条件】 ? 左に曲がって、(初めて)正面にその建物が見えます。
 - d. 【譲歩】 あなたの言い分は認めるとして、(それでも)あなたはまちがっていると思う。

このように見ていくと、*as* にも分詞構文にも「テ」にも、この4用法を認めなくてはならないように見えるが、(33)(34)を観察してみると、この4用法は、これらの語・文法事項のもつ用法ではなく、人間の認知構造によるものであると言うことがいえよう。(33)は、(31)から分詞構文の形をとったもの、(34)は(32)から「テ」をとったものである。これらの文にも同じように〈時〉〈理由〉〈条件〉〈譲歩〉の意味用法を認めることができる。

- (33) 無接続文 ((31)から分詞構文の形をとったもの)
- a. 【時】 I walked along the street. I met a friend of mine.
 - b. 【理由】 He was sick. He stayed at home.
 - c. 【条件】 You turn to the left. You will see the building right in front of you.
 - d. 【譲歩】 I admit what you say. I still think that you are wrong.
- (34) 無接続文 ((32)から「テ」をとったもの)
- a. 【時】 通りを歩いていた。私は友人に会った。
 - b. 【理由】 病気が長引いた。彼は家にいた。
 - c. 【条件】 左に曲がる。初めて正面にその建物が見えます。

- d. 【譲歩】 あなたの言い分は認める。(それでも) あなたはまちがっていると思う。

この現象については、Michotte の「因果関係知覚」(Perception of causality) (Michotte 1963) によって説明ができるであろう。² Michotte はスクリーンに映し出される 2 つのボールのアニメーションを自在に動かし、大人が因果性知覚を生じる条件について調べている。大人は 2 つのボールが衝突する事象を提示されると、この 2 つのボールの衝突に因果関係を認め、一つのボールがもう一つのボールを動かす「原因」となったと報告する。(もちろんこの 2 つのボールはアニメーションであり、プログラムによって動いているのにすぎない。) しかしながら、2 つのボールが接触後、静止していたボールが動き始めるまでに遅延があったり、接触する前に静止していたボールが動き始めたりすると、因果性を認めることはなかった。つまり、2 つのボール (事象) が同時に動く際には、人間は、その 2 つの事象間に因果関係を認める傾向があるというのだ。

ここで 2 章でみた古賀 (1984) を思い出してみよう。古賀は (35a) において *I* はまだ玄関にいと考えられ、(35b) の *I* は、ドアからもうすでに離れているということから、*as* が何らかの行為を表す節と使われる際には、その 2 つの状態ではなく、その同時性や動的同時進行性 (dynamic progression) を表すとした。

- (35) a. As I left the house, I remembered the key. (= 28(a))
 b. When I left the house, I remembered the key. (= 28 b)
 (古賀 1998 : 24)

つまり、*as* は、同時進行性を表すとしたのである。

これを元に戻ると、*as* の〈時〉〈理由〉〈条件〉〈譲歩〉を説明することが可能であろう。2 つの事態において同時性を表すとき、人間は「事態間読み込み」を行い、まず最初にデフォルトとして〈時〉そして〈理由〉を読み込み、その 2 事態間に因果関係が認められないときは、〈譲歩〉あるいは〈条件〉を「読み込む」と説明できる。

6. サポート

いくつかの研究が本論文の結論をサポートするとして、引用することができるが、ここでは、Quirk et al. (1985) が引用している例文をひいてみたい。

Quirk et al. は(36)について、この文は時間、理由のどちらの意味をも持つことができると主張している。

- (36) As he was standing near the door, he could hear the conversation in the kitchen.

²この点については、信州大学人文学部今井章教授から貴重なアドバイスを頂いた。

[“Since he was standing near the door ….” Or “While he was standing near the door…”] (Quirk et al. 1985 : 1105)

このような例文は、壁がすごく薄く本来ならドアの近くに立っていれば中の話し声は完全に聞こえるはずであるというような状況においては、〈譲歩〉の意味をも持つことができるであろう。つまり、この例文は、*As* 本来に〈時〉〈理由〉〈譲歩〉の意味があるのではなく、状況を人間が「読み込んで」意味用法を理解しているとする、本論文の主張をサポートすると言えよう。

7. 結論

本論文では、*as* の意味用法を包括的にみる一部として、*as* のもつ〈時〉〈理由〉〈条件〉〈譲歩〉の用法を見てきた。そして、一般的には *as* の「意味」として扱われるこれらの4用法は、*as* 自体が持っている意味ではなく、人間の認知能力により、*as* のコアの意味に事態を読み込んでいるものに過ぎないということを見てきた。つまり、*as* はコアとして「同時性」という意味をもち、会話者は「事態間読み込み」によってこれらの4つの意味を読み込んで会話内で *as* の意味用法を推測しているのに過ぎなく、言い換えるなら、人間の認知能力により、様々な意味用法が作られるということを見てきた。

まとめると、本論文は、以下の3点を見てきたといえよう。

(37) 本論文の結論

- a. 一般的に「意味」と呼ばれるものは、その語がもつ「意味」でなく、話者が会話内で行っている「事態間読み込み」（推論）の結果であることがある。
- b. 多義の意味用法の広がりには、一般的に言われているような metaphor や metonymy によるものばかりでなく、人間の知覚により産まれることもある。
- c. *As* の意味は一般的に思われているような意味（「時」、「譲歩」など）をもっているのではなく、2つの事態をつなげ同時性を表すというコアを持つものである。

参考文献

- Brugman, C. (1981) *Story of Over*. master thesis, UC-Berkeley. Berkeley, California.
- (1985) *The Story of Over. Polysemy, Semantics, and the Structure of the Lexicon* (Outstanding Dissertations in Linguistics). London: Taylor & Francis.
- Hanazaki M. (2004) "Toward a Model of Principled Polysemy" *English Linguistics*. Vol.22 (2). pp. 412-442.
- (2007) "The "Habitat Segregation" of the Polysemous Prepositions Denoting a Higher Position," *JELS*. 24
- Hanazaki, M. and K. Kato (2006) "The Semantics of *As*: TIME (WHEN), REASON, RESULT, CONCESSION" 『英語の「機能語」と呼ばれる語のネットワークと孤立用法に関する意味論

- 的・史的研究』科学研究費補助金研究成果報告書. pp. 89-100.
- (2004a) "The Semantic Network of *By*" in *Studies in Modern English: the Twentieth Anniversary Publication of Modern English Association of Japan*. Tokyo: Eicho-sha. pp.337-352.
- (2004b) "The Semantic Network of *By* Revisited" 『人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』第38号. pp.23-38.
- 市川 泰弘 (1986) "As 譲歩構文の特異性" 『英語教育』 Nov. pp.66-68.
- Jackendoff, R. (1973) "The Base Rules for Prepositional Phrases," in *A Festschrift for Morris Halle*. eds. S. Anderson and P. Kiparsky. New York: Holt, Rinehart and Winston. pp. 345-356.
- 加藤 鉦三 (2006) "並列弁別表記モデルのラフスケッチ"
- (2007) 「「として」の As」 『英語青年』
- 加藤 鉦三 & 花崎美紀 (2003) 「By の意味論」 2003年 5月. 近代英語協会第20回大会 (東京外語大学).
- (2006a) 「Over の意味論」 2006年10月. 日本英文学会中部支部第59回大会 (三重大学).
- (2006b) 「タイラー・エヴァンズの Over を批判する」 『人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』第41号 pp. 19-36.
- 衣笠 忠司 (1979) "時を表す as" 『語法研究と英語教育』 第2号.
- 古賀 恵介 (1998) "When の意味論" 『人文叢論』第30巻第3号. 福岡大学 福岡大学総合研究所 pp.1639-1666.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*. vol 1. Stanford: Stanford U. P.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Michotte, A. (1963) *The Perception of Causality*. New York: Basic Books.
- 小川 明 (1985) "名詞句を限定する as 節" 『英語青年』 Dec. pp.444-445.
- Quirk et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. New York: Longman.
- 瀬戸 賢一 (2000) "多義語の記述に向けて" 2000年11月. 日本英語学会第18回大会 (甲南大学).
- 瀬戸, 山口, 武田, 小森 (2000) "多義語の記述: 理論と方法" 2000年11月. 日本英語学会第18回大会 (甲南大学).
- Taylor, J. R. (1989). *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.
- (1993) "Prepositions: Patterns of Polysemization and Strategies of Disambiguation" in *The Semantics of Prepositions: From Mental Processing to Natural Language Processing*. ed. Cornelia Zelinsky-Wibbelt. New York: Mouton de Gruyter Berlin. pp. 151-175
- Tomasello, M. (2005) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Oxford, MA.: Harvard University Press
- Tyler, A. & V. Evans (2003) *The Semantics of English Preposition: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge U.P.
- 八木 克正 (1984) "接続詞 as の用法—理由と譲歩—," 『英語学』 27号. pp. 59-76.
- (1993a) "形容詞節を導く接続詞 as (1)" 『英語青年』 vol. CXXXIX-2. pp. 63-65.
- (1993b) "形容詞節を導く接続詞 as (2)" 『英語青年』 vol. CXXXIX-3. pp. 124-126.
- Wittgenstein, R. (1953) *Philosophical Investigations*. Cambridge, MA: Blackwell.

データソース

British National Corpus

Brown Corpus

COBUILD

研究社英和中辞典

OALD (Oxford Advanced Learner's Dictionary)

Random House English Dictionary

(2009年11月2日受理, 11月24日掲載承認)